

2006年2月2日

殿

前橋の文化と未来を考える会

有志 長屋郁子、高橋里枝子

岡部好弘、増田晋一、中島資浩

赤煉瓦ネットワーク 事務局長 立花 恒平

NPO法人 街・建築・文化再生集団 理事長 星 和彦

旧大竹酒造レンガ蔵（醸造蔵）及びレンガ煙突の保存・活用に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、市民活動につきましては多大なご理解を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、伝え聞くところによりますと、前橋市三河町にあります旧大竹酒造の土地・建物が不動産取引業者に所有権移転されたとのこと。この敷地は、二中地区（第一）土地区画整理事業区域内にあります。また、同敷地内には前橋市にとって貴重な歴史的建造物である「旧大竹酒造レンガ蔵・レンガ煙突」が建っておりますが、上記の状況から、同歴史的建造物が取り壊しの危機に瀕している旨、聞き及んでおります。

しかしながら、改めて申し上げるまでもなく、「旧大竹酒造レンガ蔵・レンガ煙突」は、前橋市内に現存する数少ないレンガ建造物であります。先年には若宮町の新勢館レンガ倉庫、上毛倉庫（株）若宮営業所レンガ倉庫があいついで解体されました。レンガ建造物は、かつて、県都前橋の近代化と繁栄の象徴として数多く建設されましたが、現在、旧市街地に残るレンガ建造物は、建物10棟（内登録文化財1棟）、煙突2基、刑務所の塀1箇所を残すのみになりました。このまま推移しますと、近い将来、前橋の歴史の証の大半が失われてしまうと危惧されます。

旧大竹酒造レンガ蔵は、造り酒屋の醸造蔵であり、「前橋市都市景観形成近代建造物調査報告書」は、県内でも誇り得る優れた遺構である、と述べています。旧主屋と同時に建設されたと伝えられ、主屋には大正12年4月30日と記した棟札が残されており、その年の9月に発生した関東大地震以前の建設であることがわかります。また、棟札からは、施主と棟梁の名前が判明しています。

建物の特徴では、出入り口に弓形アーチが用いられていますが、明治期に建てられた洋風のレンガ倉庫と違って、伝統的な蔵を意識していると考えられます。屋根の破風、軒下部の蛇腹部、出入り口廻りや基礎等に焦げ茶色の焼き過ぎレンガを意識的に用いているこ

と、また、補強を兼ねた真壁風の柱型など、同様な意匠の山賀レンガ蔵（現在レストランで活用）とともに、前橋市の歴史のみならず、日本近代建築史の視点からみましても、県内外で誇りうる優れた歴史的建造物であるといえます。非公式ですが、国の文化財建造物専門家や全国組織の赤煉瓦ネットワークの皆さんにも見て頂き、貴重なものであるとのお墨付きを頂きました。また、先年、歴史的建造物の構造の権威である京都大学西澤英和先生もご覧になり、先生からは、構造的に健全であるとお話を伺いました。

私たち市民にとって歴史はこの前橋に生きてきたという証です。まちが合理的で、きれいになれば良いとばかりは言えません。新しい前橋市は明日生まれるというものではないと思います。市民が営々と築き上げてきた歴史の延長線上にあると考えます。旧大竹酒造は、かつて芳町と呼ばれた古い町の中にあります。また、周辺はかつての庶民的な前橋市の面影を残しています。近い将来、周辺は土地区画整理で別な町に生まれ変わると思います。その時「旧大竹酒造レンガ蔵・レンガ煙突」が失われているということは、市民と前橋市にとって、歴史と生きてきた証を失うことになると考えます。かつて、前橋市建設部は、「群馬建築」*2に前橋市「都市景観」考察としてこの建物の活用を提案しています。土地区画整理事業の手法と歴史的景観を保存するという事は、施策として対峙しているものではないと考えます。歴史的景観を保存しながら新しいまちを創る手法も有る筈です。

現在日本の各都市で、個性あるまちづくりが模索されております。前橋市にとって、旧大竹酒造レンガ蔵だけでなく、そのほかのレンガ倉庫や洋館、和風住宅等、まだ数多く残る歴史的建造物は、市民共通の重要な歴史的遺産ならびに地域資産であるとともに、この都市を特徴づける建物といえます。また、21世紀となり、前世紀までの壊して建てる、スクラップ・アンド・ビルドの社会の在りかたが、省資源ならびに循環型社会の構築の視点から求められております。私たち市民は、これらのことを、これからの前橋市のあるべき姿を画く視座として、極めて重要なことと思っております。

私たちは市民グループとして、この建造物の存続、ならびに今後生じます保全・活用の問題（保存技術・管理・活用企画・運営）に関しまして、可能な限りお手伝いをさせていただきたいと考えております。

前橋市におかれましては、是非この優れた建物の保存・活用を、前橋市の施策として採り上げて頂きたいと、要望いたします。

敬具